

命あるかぎり

今年のお正月も富士見中の校舎4階から初日の出を見るため、元旦の朝6時50分頃には、東の空から太陽が上がってくるのを待っていました。今年は雲があり、少し時間はかかりましたが、初東雲（はつしののめ）が美しく茜色に染まる初茜（はつあかね）を楽しむこともできました。目を転じると、富士山もくっきり見えました。富士見中にとって、とてもいい1年間になる予感です。いいお正月でした。

ここでは、「命あるかぎり」と題したお話をします。2年3組は、校内音楽会当日には歌うことができず、ふれあい講演会の前に、合唱曲「命あるかぎり」をステージで披露しました。ふれあい講演会の講師、高橋浩美先生（「旅立ちの日に」作曲）は、この合唱曲「命あるかぎり」のもとになっている詩「命」（宮越由貴奈）があること、そして先生ご自身が、本「電池が切れるまで」をお読みになっていたことなどをお話し下さいました。私も「電池が切れるまで」を購入し、冬休み期間を利用して読んでみました。

宮越由貴奈さんは、長野県富士見町に生まれました。4姉妹の長女として、妹たちの面倒をよくみる、元気いっぱいの子でした。保育園5歳の時、足の痛みが心配になり、大きな病院で検査してもらおうと、「神経芽腫（小児がんの一種）」の発病がわかったのです。それからは、病気との闘いでした。手術・入院を繰り返しますので、家族とも離れざるをえません。痛みや治療の副作用で食事をとることもままならず・・・そんな日々の中でも、由貴奈さんは、同じ病室などのお友達に優しく明るく接していました。長野県立こども病院に転院してからは、病院内の院内学級に通いました。小学校4年生の時の理科の授業で乾電池について学んだ由貴奈さんは、後に詩「命」を書きます。その4ヶ月後、由貴奈さんは11歳の短い生涯を閉じてしまうのです。※詩の音読

由貴奈さんは、お友達と勉強できる院内学級が大好きだったといいます。埼玉県には、埼玉県立小児医療センターという大きな病院の7階全フロアに「埼玉県立けやき特別支援学校」があります。この病院に入院している小・中学生が通っているのです。私が上尾市の中学校に勤務していた際に、開校したばかりの埼玉県立けやき特別支援学校と学校間で交流する機会がありました。手紙やメッセージの交換では、「闘病は大変だけど、できることはたくさんあります」「入院中はものごとをじっくり考えるチャンスだと思います」など前向きな内容が多かったです。自分の病気や将来に対する不安、勉強が遅れる不安、家族や友達とも会えない寂しさと向き合い、前に進もうとしています。

生徒会の生徒とともに、さいたま新都心の学校を訪問したこともありました。逆に、けやき特別支援学校の細谷校長先生に御来校いただき、御講演をいただいたこともありました。その時のお話は10年ほど経った今でもよく覚えています。「本当に強い人とは、腕力の強い人ではありません。自分をよりよく変える勇気をもつ人です。皆さんには、できないことなんてありません。思い切ってチャレンジして下さい。」

合唱曲「命あるかぎり」は「精一杯生きるよ 一度しかない人生を」という言葉で結ばれています。新年のはじまりです。今この時に「精一杯」向き合いましょう。思い切ってチャレンジをしてほしいと願っています。

熊谷市立富士見中学校長 田沼良宣